

2024年6月30日 説教「この青年が」

使徒の働き 23章 11～24節

議会の前で語り出し、「きよい良心をもって」と語り出すと、大祭司から否定されたパウロ。議会はパリサイ人とサドカイ人の間に争いが生まれ、パウロは改めて千人隊長により兵營に戻されたのでした。

1. パウロ殺害の陰謀 (11～15節)

- ① 勇気を出しなさい (11) 「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことばをあかしたように、ローマでもあかしをしなければならない』と言われた。」

パウロの身边は大変危ういことになっていました。しかし、そんな夜、主は彼に「勇気を出しなさい」と励まされたのです。そして、消えかけたローマ行きの約束を改めて示してくださったのです。失望していたパウロにとっては、大きな励ましでありました。

- ② パウロを殺すまでは (12～13) 「夜が明けると、ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺してしまうまでは飲み食いをしないと誓い合った。この陰謀に加わった者は、四十人以上であった。」

翌日になると朝から、ユダヤ人たちはパウロの殺害の為に集まって陰謀を企てました。彼らの覚悟はすさまじいものでした。なにしろ、パウロを殺害するまでは飲み食いはしないと誓い合ったというのです。それも40人もの輩がそこに集まったのです。

- ③ 祭司長の所に行き (14～15) 「彼らは、祭司長たちのところに行って、こう言った。『私たちはパウロを殺すまでは何も食べない、と堅く誓い合いました。そこで、今あなたがたは議会と組んでパウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところ連れて来るように千人隊長に願い出てください。私たちのほうでは、彼がそこに近づく前に殺す手はずにしています。』」

彼らは祭司長のところに行って、自分たちの覚悟と謀議を伝えました。その策略は祭司長や議会がパウロを詳細な取り調べと称して呼び出し、そこに来る前に殺してしまうというものでした。そのために、彼らは千人隊長にそれを申し出てもらいたいと嘆願したのです。

2. 千人隊長に伝える青年 (16～20節)

- ① パウロの甥が (16～17) 「ところが、パウロの姉妹の子が、この待ち伏せのことを耳にし、兵營に入ってパウロにそれを知らせた。そこで、パウロは、百人隊長のひとりを呼んで、『この青年を千人隊長のところ連れて行って下さい。お伝えすることがありますから』と言った。」

この情報をパウロの甥が入手したのです。そしてパウロに知らせました。パウロは百人隊長に青年を千人隊長の所に送るよう願いました。



②囚人パウロの依頼 (18)「百人隊長は、彼を連れて千人隊長のもとへ行き、『囚人のパウロが私を呼んで、この青年があなたにたにお話しすることがあるので、あなたのところに連れて行くように頼みました』と言った。」

パウロがローマ市民であることが効いているのか、百人隊長は即座に千人隊長の所に青年を連れて行きました。そして囚人であるパウロの依頼は実現しました。青年は千人隊長の前に立ちました。

③青年が千人隊長に伝えたこと (19~20)「千人隊長は彼の手を取り、だれもない所に連れて行って、『私に伝えたいことというのは何か』と尋ねた。すると彼はこう言った。『ユダヤ人たちは、パウロについてもっと詳しく調べようとしているかに見せかけて、あす、議会にパウロを連れて来てくださるよう、あなたにお願いすることを申し合わせました。』」

千人隊長は青年の手を引いて声が聞こえない所で聞きました。青年はユダヤ人たちの陰謀について伝えました。千人隊長に対する申し出があるでしょうが、それは見せかけだと訴えたのです。

3. 驚くべき対応 (21~24 節)

①青年の訴え (21)「『どうか、彼らの願いを聞き入れないでください。四十人以上の者が、パウロを殺すまでは飲み食いしない、と誓い合って、彼を待ち伏せしているのです。今、彼らは手はずを整えて、あなたの承諾を待っています。』」

青年は続けて、彼らの願いを受け入れないように訴え、40人以上の人々がパウロを殺すまでは飲み食いしないと決意するほどに血気にはやっていることを伝えました。さらに彼らの意図はパウロをから聞くことではなく殺すことで、その目的を果たすためにも隊長の承諾を待っていると切迫した状況を述べたのでした。

②青年への戒め (22)「そこで千人隊長は、『このことを私に知らせたことは、だれにも漏らすな』と命じて、その青年を帰らせた。」

千人隊長は青年に、この情報については、誰にも漏らさないようにと戒めて、帰らせたのでした。

③千人隊長の命令 (23~24)「そしてふたりの百人隊長を呼び、『今夜九時、カイザリヤに向けて出発できるように、歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人を整えよ』と言いつけた。また、パウロを乗せて無事に総督ペリクスのもとに送り届けるように、馬の用意もさせた。」

千人隊長の対応は迅速でした。ふたりの百人隊長を呼びつけ、パウロをカイザリヤ駐在のペリクス総督に送り届ける手筈を整えたのです。ローマ市民だからとはいえ、その護衛体制は驚くものでした。出発は、今夜9時。歩兵200名、馬に騎乗して戦闘する兵70人、槍を装備した兵200人、合計で470人がパウロの護りにあたったのです。

《結論》今朝の説教題は「この青年が」です。この青年はパウロの姉妹の子でした。彼はユダヤ人たちの陰謀の始終を、どのようにしてかはわかりませんが、知って、それをパウロに伝えたのです。すると、パウロはすぐに、その少年を千人隊長のところに送るため、行動を起こしました。少年はパウロ殺害の陰謀について、千人隊長に伝えました。その結果は驚くべき対策でした。パウロを必死に殺そうとしていた40人余りのユダヤ人が待ち構えていましたが、千人隊長は470人もの兵隊を護衛としてつけて、ペリクス総督に送り届けることにしたのです。普通ならあり得ないようなことです。

どうして、このように事が進んでいったのでしょうか。それには上記のような経過に何らかの因があった可能性がありますが、根本的な理由は主なる神の強いご意志があったからです。11節をご覧ください。「あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかししなければならぬ」。主がパウロをローマであかしをするまでは、その命を守ることが宣言されていたのです。主の不動のご意志があればこそ、青年は情報を得る機会が与えられ、パウロに伝える心が備えられ、パウロは適確に動かされ、百人隊長や千人隊長にパウロを護衛させることに導かれたのです。それは人の考えを越えた大いなること(エレミヤ33:3)でありました。

ところで、あなたがこの青年だとするならば、情報を得た時どのような行動をしますか。「君子危うきに近寄らず」を思い出して、何もいませんか。この青年はパウロの甥だから、関わったのだという人がいるでしょう。そうでもありません。人は親族であろうと何であろうと、結構冷たいものです。この青年が迷うことなく、パウロの所に情報を伝えたのは、主の導きというしかありません。

先週私が赴いた印西市には、最近グーグルのデータセンターができたということで、話題となりました。それでは、どうして印西市にそうした施設ができたかという、東京や成田に近いというものもありますが、何と言っても地盤が固いのでデータ保存の安全性が高いからだそうです。私達も世の言う土台や力に心を向けがちですが、私たちには、この世的な頼りとなるものはありません。しかし実を言えば、最も頼りとなる土台の上に生きているのです。「尊い礎石であるイエス・キリスト」にあって生きている者たちです。この方に信頼して歩む者達です。信頼して歩むならば、決して失望させられることがないのです(1ペテロ2:6)。そしてだからこそ主は、「勇気を出しなさい」と励まされました。また、ヨシュア記においても、「強くあれ、雄々しくあれ、恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである」(1:9)とも励ましてくださっています。

囚人パウロがおかれた事態は危険でした。しかし、ローマ兵達の護衛という、この世の力も備えられました。あなたの置かれている現場も難しいかもしれませんが、しかし、あの青年のように、一歩踏み出していきましょう。具体的な判断を迫られる場合や緊急事態のときなど、まずは祈りましょう。「主よ。どうしたら良いのか教えてください」と叫びましょう。そして、揺るがない土台である主イエスに信頼し、勇気を出して、進んでいこうではありませんか。